

---

# 聖夜の夜に銃声を

隆

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

聖夜の夜に銃声を

### 【Zコード】

N6175Z

### 【作者名】

薩

### 【あらすじ】

個人で冊子に投稿します

真冬。

寂れた酒場のカウンターで、  
「空しいものだ、世の中は常に廻り続けているんだ、俺をのぞいて  
は。」

と青年カポネはひとりごちた。

力ポネといつても、名前が同じだけで、暗黒社会を牛耳っていた伝  
説のボスではない。

むしろ、ああいう勝ち組になつてみたいものだ。  
と青年は心の底からそう思つていた。

そして、自分のような人間を英語では *underdog* = 負け犬と  
いつのだつたと、思い出す。

青年はなんだか無性に情けなくなつて、手元にあつたブランデー  
をグラスに満たすと、不満と涙を無理に胃袋に押し戻し、続いて深  
いため息をついた。

酒という代物は、青年にとつてある種、女よりも魅力的だった。

この琥珀色の液体は、悩める青年の喉をまるで歌うかのように何と  
も快い速度で駆け下り、  
かと思えば燃え盛る聖火の如く腹の底からじわじわと喉を焼いてく  
るのだ。

なんといつ悦楽！

この瞬間だけは、大金持ちだろうと貧乏人だろうと、勝ち負けな

ど関係なく、酒の神であるバッカスに、感謝の意を表せざるおえな  
いだろ。」と青年は確信している。

しばらくの間、遠い眼をして、グラスを傾けながら物思いにふけつ  
ていた彼だったが、ふと、目の前の人影に気付いた。

その人影というのは、この店の店主である老紳士だった。

金縁の眼鏡にロマンスグレーの頭髪が印象的な、いかにも知的と思  
われる、それでいて、独特な存在感を放つている人だ。

この酒場を初めて訪れた時から、もう五年以上の付き合いになる、  
青年が唯一気が置ける人物であった。友人とまでは、いかないが  
どことなく、懐かしい気もある。

老人は穏やかな笑みとともに、

「やけ酒は、体に良くありませんよ。」と告げた。

その言葉に青年は、

「放つておいてくれよ、マスター。」と半ば消え入りそうな細い  
声で答えた。

自分を気遣ってくれようとする、その優しさが、今の青年には、ど  
んな罵倒や暴力よりも  
酷い痛みを伴うものだった。

それがどれ程のものかは、当の本人でなければ、解るまい。

老人の方はと、

彼の心情を知つてか知らずか、そつと青年にタバコを一本差し出した。

それは老人が、長年愛煙している銘柄で、すこしラムの香味がある、喫煙家なら誰でも目にしたことがあるポピュラーな代物だった。

「貴方なら、これくらいの重さのある紫煙の方がお好みかな、と思いましてね。」

自分好みだと、店主の独断と偏見により渡されたそれを、青年は受け取り、ジッポーで火を点す。

そしてゆっくりと煙を肺に、いれてやる。

中々だ…悪くはないな。と彼は頭のすみに残ったわずかなスペースで感想を綴り、息を吐いた。

視界に一時的にだが、独特な香りの霧が立ち込める。やがて、癖のある重い煙に少し眩眩を覚えながら、おもむろに青年は口を開いた。

「いいタバコだ、だが…俺には少し強すぎるかもしね。」

そう青年が、感想を述べると、老人は

「そうですか、いえね…貴方があんまり哀れに思えたのと、タバコの感想が聞きたかっただけですよ。」

とさも氣まぐれと云ひよつた口調でそつと言つた。

と青年はムツとして捨て鉢になつた。

「解つているのなら、どうしてそんなことを・・・口に出すんだ!」

不快感をあらわにして、青年は老人に言い寄る。

「それでこそ、甚振りがいがあるといつものだ・・・興味深いです、よ。」

喜劇を見るかのような目で、老人は青年を射抜く。

「とつとど、死んじまえ・・・」の・・・

「『クソジジイ』ですか? カボネ君?」

「! !」

青年は、一瞬、一瞬だが・・・老人からただならぬものが、威圧という言葉を凌駕する内臓をえぐりだされるような雰囲気を感じ、動けなくなつた。

「あんた・・・何者だ? 一般人じゃないだろ?」  
震える声で紳士に問う。

あれだけの歳月付き合いがあると云うにも関わらず、

まるで別人のように感じてしまつほど、それは、強烈なものだつた。

やがて、二人の間に長い沈黙が訪れた。

青年は内心とてもうるたえていた。この空氣をいかに打破しようか?

また、

なんて愚かな事をしたのだ・・・と自分を叱責もえした。

この人はむこう側の人間じやないと、なぜ詰る事が出来なかつたの  
だろう・・・

青年がまだ駆け出したばかりのころである、スラム街の生ま  
れであるカポネは金欲しさに薬の売買を生業とする組織に足を突  
っ込んだ。

やはりそれだけでは、生活は苦しそうまでであったので、窃盗や、違  
法賭博で食いつなぎ

拳句の果てには仲間内の金を使い込んでしまった。

その事が、所属していた組織の面々に露見し、半死半生の目にあつ  
た。

命からがら逃げ出したかと思えば、追手がかかり、もう黙だ、

死ぬのだろう、自分は、と半ば腹を括っていた時、初めて老紳士と  
出会つたのである。

『おい、アンタ・・・俺をかばってくれるのはいいが、アンタまで  
とばっちりをくつねー!』

そう、自分が言ったのを、今でも鮮明に覚えている。

しかし、紳士はいたつて普通に『大丈夫、慣れますから、ここだけは・・・安全ですよ。』

と・・・たしか、そう、言っていた。

何故・・・安全なのか・・・

それは・・・

「私の名は、ルチアーノ、ラッキー・ルチアーノです。」

突然響いた紳士のテノールに、青年の思考回路は完全に停止した。

なんだつて?今何て言つた?!

ルチアーノ・・・あの大ボスの?

「君をずっと、探していたんだ、アルと同じ名前の哀れな青年を」

探していた?この、俺を?

あまりに唐突過ぎて、言葉が見つからない。

それでも、紳士は淡々と話していく。

「私は、アル・カポネとは、何十年と付き合いがありましてね、裏社会を出てからはこうやってしがないバーをやっています。」

話を聞くと、どうやら、ルチアーノの戦友であり一番の理解者である、アル・カポネ（通称、ドン）は

今、病に体を蝕まれておりもう長くないのだそうだ。

弱体化してゆく友人の組織の為、そして何より親友として、何か出来ることはないかと尋ねたところ

影武者がほしい、と言つてきたそうだ。

ドンが言うには、「私も、もう若くはないし戦えないだろう、いつ撃たれたっておかしくないのだ・・・」

せめて残りの短い期間は家族と共に過ごしたいと、影武者にもなりえるトップ代理を欲しがっていた。

願いを聞いたルチアーノは、出来る限り色々な「ネや組織から、有望な人材を集め、だれがふさわしいかを双方の幹部と、検討していたそうだ。

しかしながら、いい者がおらずあぐねていたそうで、最終手段として、手当たり次第にバーの密や、裏通りの住人のリストを物色していた。

「で、日に留まつたのが、俺つてわけか？」

信じられないといつ眼差しを青年はルチアーノに向ける。

「のし上がつてやうづ、といつ氣持ちが人一倍強いように私には思えました。」

ルチアーノはやさしい笑顔に戻つて、答えた。

「それに、あなたはきっと下の者たちの事も、考えて行動できると思っています。」

「ならなぜ、もひとつ早くに……？」

青年は問う。

「世界的組織を束ねるんですから、それなりの人材なのか見極めなければ、ね」と紳士は答える。

ああ、そうか、青年は納得した。

この人は、はなから、俺だと決めていたのか……はたまた、計算の内かもしけないが

初めて会つたときから、何か起こりそうな気がしていたよ、と

「勝ちなさい、勝つて思う存分のし上がりなさい、だつて貴方は生まれついてそのための武器を手に入れているのだから。」

これは餞別だと、銀の鈍く光る銃を一丁ルチアーノは青年に渡した。グリップの処にライオンの頭部と髑髏が彫られてある

素直に、美しいと感じた。

店を出ると雪が舞つていた。銀色の銃によく映える。

今日は、聖夜だと云ひ事を思い出した。

しかし、踏みとじあることはできない、踏みとじまれば、死が待つ  
ている。

神への冒瀆だと嘲笑つなら、強えばいい。

しかし、もう運命は動き出して居る。  
あとは、

上がつてゆくだけだ。

(後書き)

「めんなさい！グダグダです……もつと渋い感じにしたかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6175z/>

---

聖夜の夜に銃声を

2011年12月20日19時52分発行